

## 【問題】(演習)

出典：室井尚『情報宇宙論』／オリジナル問題

## 文章略解

現代社会は、個人がそのすべてを受容し自らを中心とした体系的の世界の中に取り入れることのできないほどの膨大な情報にあふれ、その中においては、人の主体的解釈を前提とした対象との関係が成立しなくなっている。芸術表現を例にとってみても、従来の表現主体の解釈を前提とした対象の再現という表象システムが、情報量の増大と素材の加工編集技術の変容によってその必然性を失い、危機に陥っている。この点から、現在のメディア環境が情報の処理・制御・加工技術の変容によってもたらされたものと思われる。

## 解答

- (一) 人が能動的に情報を受容しようとしなければ、書籍の側からは情報を提示しないということ。
- (二) 自らの主体的解釈によって対象の全体像を把握すること。
- (三) 現代社会で主体の知覚する対象は、その量の膨大さのために、主体を中心とした体系的世界への受容が不可能となっているから。
- (四) 流通する情報量の増大と素材の加工技術の変容とによって、対象への主体的解釈とその表現という芸術の前提が無効化したということ。

(五) 膨大な量の情報と素材の加工編集による表現とに特徴づけられる現在のメディア環境は、主体の対象への解釈と特定の表現様式によるその再現という従来の表象システムが情報処理技術の変容によって必然性を失った結果として、もたらされたものだという事。

[118字]

(六) a || 傍受

b || 比喩 (譬喩)

c || 現前

d || 皮膜

e || 狭間 (間)

## 現代語訳

昔、(中国の漢の国に司馬) 相如という人がいたという。世にたとえようもないほど貧しくて(生活に) 困窮していたけれども、さまざまなことを知っていて、学識は並ぶものもなく、(また音楽は君子の徳を示すというが、七絃の) 琴をみごとに弾いた。卓王孫という人のところへ行つて、月の明るい(夜は) 一晩中、琴を奏でて(過ごして) いたところ、この家の主人の娘で卓文君という名の人(相如の琴の音色を) 心にしみて素晴らしく感じて、日頃はこの(彼の琴の) ことをひたすら称讃し楽しんでばかりいたので、この文君の両親は、(娘が) 相如に近づくの疎ましく思い、気にくわなく思っていたけれども、(娘のほうは) 琴の音をすばらしいと心に深く感じたのであろうか、この男と結ばれて(駆け落ちして) しまった。娘の父親は、さまざまの財宝に満ちあふれていて、世の中の貧困(のみならずあらゆる辛いこと) というものを知らなかった。しかしながら、(娘が) この貧乏な男(「相如」と夫婦になったことを、大いに気に入らない事態だとすっかり思いこんで、まったく娘の行方はわからなかったけれども、(そのことを) ちっともつらいこととは思わずに、年月を過ごしていた。(一方、) この夫(「相如」が、(妻となった文君といっしょに) 蜀という国へ行った途中に、昇仙橋という橋があった。その(橋) を歩いて渡ろうとして、橋柱にあることを書き付けた。(その文句は) 「自分は(いつか) 大きな車や肥えた馬に乗(るような身分にな) らなかったなら、二度とこの橋を渡って帰ることはするまい」と誓って、蜀の国に(妻とともに) 身を隠してしまった。その後、(相如は) 望みどおりに立派に出世して、(再びこの昇仙) 橋を渡って(故郷へ) 帰っていった。妻(「文君」) は、長年のあいだ貧乏しながらも(この男に) 連れ添った甲斐があつて、親しい人にも、親しくない人にも、世の(すべての) 人々から、くらべようもないほど羨ましがられた。

沈みつつ……あの不遇であつたときに私が(橋柱に) 書き付けた言葉は、(昇仙橋の名のとおり) 天に昇るような榮達の端緒なのであつたなあ

気を長くもつて自分をないがしろにしないのは、今も昔もやはりすばらしく思われるよ。

- (一) アⅡ相如はどうしようもなく生活に困窮していたけれども  
 イⅡ父は大いに気に入らない事態だとすっかり思いこんで  
 ウⅡ父は、少しも辛いこととは思わずに、長い歳月を送っていた
- (二) 蜀で努力して豪勢な乗りものに乗れるほどの立身出世を遂げるまでは故郷には帰らない決意だということ。
- (三) 昇仙橋の橋柱に書き付けた決意は、長いあいだ辛抱強く努力して栄達を遂げるための端緒であったということ。

出典：中村雄二郎『臨床の知とは何か』／オリジナル問題

文章略解

経験とは、主体が能動的に他者と相互行為をおこなう営みである。身体をもつ存在である主体は、他者からの働きかけを受けることで受苦にさらされ、自立した存在ではなく、他者や世界との関係性の中にある重層的な存在へと変化していく。自己は関係性から独立して存在するのではなく、関係性の中で拡散していくのであり、経験を通して自己は世界との関係をより緊密なものにしていくのである。

解答

- (一) 精神と肉体とが不可分に結びついた存在が自ら営む、他の人々とのかわり。
- (二) 出来事との出会いが、個々の人間の生の全体性と結びついたものになるということ。
- (三) 身体をそなえた能動的な主体が、世界や他者との関係性の中でその働きかけを受けながら振舞うこと。
- (四) 現実とのかわりが深まるにつれて、個々の主体は、他者や世界との関係性の中で多様性が高まるから。
- (五) 経験の最も基本的な要因である能動性が、観念的抽象的なものとどまらず持続性を持つためには、活動する身体によって支えられねばならない。しかも、その身体を有する以上、他者からの働きかけを受け、現実の様々な障害に突き当たらざるを得ないから。

〔117字〕

(一) まず、傍線部前半の「〈活動する身体〉」についてだが、傍線部直後に、「ここで活動する身体というのは、……」と説明されている。しかし、これに続く述部は「在来の心身二元論の、精神と区別された物体として捉えられた身体のことではない」と、否定の言い方で終わっている。否定は、ヒントにはなるが、「じゃあ、何なのか」という方を重視すべき。それが、「《精神とは活動する身体である》として捉えられた意味での身体＝精神のことである」(4行目)の一文である。これが、「そのような主体」という指示語で受けられ、「そのような主体が他者との間でおこなう相互行為」と続く。これは、問われている傍線部Aとほぼ同内容の表現。傍線部後半の「……主体がおこなう他者との間の相互行為」という表現と、「……主体が他者との間でおこなう相互行為」という表現との類似性に着目しよう。

〔活動する身体〕をそなえた主体がおこなう他者との間の相互行為

⇒

〔補足説明〕

ここで活動する身体というのは、在来の心身二元論の、精神と区別された物体として捉えられた身体のことではない。⇐ 否定  
 《精神とは活動する身体である》として捉えられた意味での身体＝精神のことである。⇐ 肯定

⇐

そのような主体が他者との間でおこなう相互行為

続いて、傍線部後半の「他者との間の相互行為」の方だが、これは、次の段落に着目する。傍線部Aは、直前の〈経験〉の定義である。とすると、次の段落の初めの「われわれ人間は誰でも、……他者とくに他の人々とかかわりつつ、それぞれの具体的な生を営んでいく。……経験とはまず、そのようなわれわれ一人ひとりの具体的な生き方の諸側面あるいは総体のことである」という〈経験〉の定義に結びつく。「他者」の語の繰り返しで、「他の人々とかかわり」の部分が浮かび上がってくる。お互いに、自らを主体とし、他者を相手として、働きかけ、働きかけられる関係の謂である。

(二) 傍線部イの末尾「くになる」という言い方に着目すると、主部「われわれ一人ひとりの経験」と、「真にその名に値するもの」とは別物ということになる。それぞれを説明しなければならぬ。

傍線部イ直前の「そのことを考慮に置いてモデルをつくりかえよう。すると、」という表現から、「そのこと」という指示語が受ける内容が前提だと考えて、第三段落を探す。「われわれ一人ひとり」「経験」「くになる」という表現の繰り返しから、「けれども、ただなにかの出来事に会ったからといって、それがただちに、われわれ一人ひとりの生の全体性に結びついた経験になるわけではない。」(13～14行目)が見えてくる。傍線部イ直後の「われわれがなにかの出来事に会って」という表現からも、この箇所が見えてくるはずだ。その前の「なにかのかなり重大な出来事に会っても、……」の部分は、「なにかの出来事に会った」ことの極端な例であり、「ほとんどなにも刻印をわれわれのうちに残さないような経験、つまり内面化されることのない経験、うわの空の経験、疑似的な経験というもの」は、「われわれ一人ひとりの生の全体性に結びつ」かない「経験」の例だ。では、「それが……われわれ一人ひとりの生の全体性に結びついた経験になる」ためには、という趣旨で、傍線部イにつながっていく。ここから考える。

「われわれ一人ひとりの経験が」に該当するのが、「それが」すなわち「なにかの出来事に会った」こと。「真にその名に値するものになる」に該当するのが、「われわれ一人ひとりの生の全体性に結びついた経験になる」こと。「刻印をわれわれのうちに残す」「内面化される」経験となることだ。

それ(Ⅱ)なにかの出来事に会ったこと)がただちに、われわれ一人ひとりの生の全体性に結びついた経験になるわけではない。

〔例〕ほとんどなにも刻印をわれわれのうちに残さないような経験、つまり内面化されることのない経験、うわの空の経験、疑似的な経験

↓われわれ一人ひとりの経験が真にその名に値するものになるのは、……

ちなみに、傍線部イ直後の叙述「われわれがなにかの出来事に会って、(能動的に)、(身体をそなえた主体として)、(他者からの働きかけを受けとめながら)、振舞うこと」は、傍線部イのために必要な条件。したがって、その後「この三つの条件」という指示語でこれを受けての「この三つの条件こそ、……ための不可欠な要因である。」の一文において、「ため」で受けられている目的「経験がわれわれ一人ひとりの生の全体性と結びついた真の経験になる」の部分が、傍線部イと結びつく。「になる」という語の繰り返し

しに着目しよう。「われわれ一人ひとりの生の全体性と結びつ」くことの重要性が裏付けられよう。

われわれ一人ひとりの経験が真にその名に値するものになる（のは、）

→

〔条件〕（能動的に）（身体をそなえた主体として）（他者からの働きかけを受けとめながら）振舞うことⅡこの三つの条件こそ

……不可欠な要因

←

経験がわれわれ一人ひとりの生の全体性と結びついた真の経験になる

（三）二つの方向から考えていこう。一つは、大きく見て考える場合だが、傍線部Ⅰ「経験が経験になる」とは、傍線部Ⅱ「われわれ一

人ひとりの経験が真にその名に値するものになる」（17～18行目）や「経験がわれわれ一人ひとりの生の全体性と結びついた真の経験になる」（19～20行目）とほぼ同内容である。したがって、（二）の説明で見た、両者で挟まれている箇所「（能動的に）、（身体をそな

えた主体として）、（他者からの働きかけを受けとめながら）、振舞うこと」が、そのための「条件」「要因」となる。

二つめは、前の段落からの関係で考える。次の図を見てほしい。

#### 〔第八段落〕

a われわれ一人ひとりが受動Ⅱ受苦にさらされるといふことは、

（否定）われわれの自己が決して簡単には自立しうるものではない、ということである。

（肯定）おのずと他者や世界との関係性のなかにあるのである。…b1

←したがって、

われわれの能動性あるいは主体は、まさに世界や他者との関係性……そうした関係性のうちに組み込まれたものになる。…b2

←そのことを通して

B われわれの一人ひとりとは、いつそう深く現実とかわるようになるのである。

〔第九段落〕  
↳このようなわけで

A われわれにとつて、経験が経験になるということは、

B 現実とのかかわりが深まるということである。

以上の関係から、a「われわれ一人ひとりが受動Ⅱ受苦にさらされるということ」とA「経験が経験になるということ」とは、因果関係で結ばれる。両者の結びつきを示すのは、さらに前の第七段落の「われわれ一人ひとりにとって経験とは、ただなにかの出来事に出会うことでもなければ、ただ能動的に振舞えば足りるということでもない。その際にどうしても欠かせないのは、身体をそなえた主体として、他者からの働きかけによる受動Ⅱ受苦にさらされるということである」(38～40行目)という部分である。

以上、二つの解答の根拠を踏まえて解答を作成してほしい。

〔四〕傍線部才を含む一文の冒頭は「そのことを、自己と経験との関係から見れば」で始まっている。すなわち、「そのこと」という指示語で受ける内容を別の角度から見ているのが、傍線部才だということになる。そこで、その指示内容を探る。直前部「自己も現実も、私も世界も、……そのような根源的経験の分化したものの、そこから派生したものになる……」がそれに当たる。この箇所と傍線部才は表裏一体であるから、さらにその直前、この段落の冒頭「もしそれを認めざるをえないとすれば」という前提条件に注目する。「それ」という指示語の受ける内容が重要。この時、「そのような根源的経験」という指示語にも着目する。

こうして更に前の第九段落を見ていくと「自己と現実、私と世界とがもつと緊密に関係し合う根源的な経験の形態として、こういうものを、どうしても認めないわけにはいかない」(53～54行目)が浮かんでくる。しかし、「それ」という指示語が直接受けているのは、「こういうもの」という、またしても指示語。そこで、今度はこの指示語の指示内容を求めてさかのぼると、「現実とのかかわりが深まるにつれて、われわれ一人ひとりの主体は、単純明快なものから重層的で錯綜したもの、関係性の網のなかに分散したものになっていった。そしてその極には、主体の完全な拡散ということが現われる。」(50～52行目)が見つかる。ここを、解答の根拠とする。

〔第九段落〕

現実とのかかわりが深まるにつれて、われわれ一人ひとりの主体は、単純明快なものから重層的で錯綜したもの、関係性の網のなかに分散したものになっていった。そしてその極には、主体の完全な拡散ということが現われる。

←〔反論〕……これは奇妙なことである。けれども、

←……自己と現実、私と世界とがもつと緊密に関係し合う根源的な経験の形態として、こういうものを、どうしても認めないわけにはいかない。

〔第十段落〕

もしそれを認めざるをえないとすれば、

↓①自己も現実も、私も世界も、

〔否定〕 それぞれ最初から独立して存在しているのではなく、

〔肯定〕 そのような根源的経験の分化したもの、そこから派生したものになるだろう。

↓②（そのことを、自己と経験との関係から見れば）

〔否定〕 初めに自己があつて、それからあとに経験が生じるのではなく、

〔肯定〕 逆に、〈経験あつての自己〉ということになる。

〔五〕 「われわれ一人ひとりにとって経験とは、ただなにかの出来事に出会うことでもなければ、ただ能動的に振舞えば足りることも

ない。その際にどうしても欠かせないのは、「というつながりから、（特に「足りることもない。」）「どうしても欠かせないのは、」という関係から、「その際に」というのは、『出来事に出会って、能動的に振舞う際に』ということになる。そこで、『能動的に振舞う際に』何故①「身体をそなえた主体として」あることが「欠かせない」のか、次に何故②「他者からの働きかけによる受動＝受苦にさらされるということ」が「欠かせない」のか、について考える。

この傍線部ウを含む第七段落は、冒頭「いいかえれば、」から始まる。それまでのことをまとめているわけだ。そこで、それ以前

の段落を見ると、第五段落末尾に「このようにして、第一の要因の〈能動的に〉は、第二の要因の〈身体をそなえた主体として〉に結びつき、具体化されるのである。」(29～30行目)とある。これは、①の要素に対応する。そこで、「このようにして」という指示語の受ける箇所が、解答の第一の根拠となる。直前「たとえば」以下の部分は例にすぎず、「それはともかく」とされているから、更にその前「ここで必要なのは、活動する身体によって支えられ、持続性を与えられた能動性である」(26～27行目)までを根拠とする。活動する身体は、能動性を支え、これに持続性を与えるのだ。ちなみに、「ここで必要なのは」は、「その際にどうしても欠かせないのは、」に対応する。

続いて第六段落をみると、末尾に「それゆえ、第二の要因の〈身体をそなえた主体として〉は、第三の要因の〈他者からの働きかけを受けながら〉に結びつき、いっそう具体的なもの、現実と深くかかわったものになるのだ」(35～37行目)とある。ここは、②の要素に対応する。したがって、「それゆえ」という語が受ける部分を、解答の第二の根拠として考える。

以上、二つの根拠箇所に基づいて解答を作成しよう。

## 現代語訳

昔の高貴な方が仰せられた(ことに)は、「もろもろの芸道には地獄がある。(というのは)その(芸を極めるために必要な犠牲という)代価というものがあるからである。(しかし)音楽(の道)には地獄がない。(なぜなら)代価無用だから(である)」「(と)。

うれしくも……嬉しいことに、罪のないことをしたものだなあ(「罪を犯すことのない管絃の道によくぞ従事したものよ」。とるに足りないわが身にとって、こんなすばらしいことはない

(音楽の道とは)こころしたものだとはいっても、(従事する)人の心がけによっては、罪ある様子にもきつと陥ってしまうにちがいない。決して決して、その(ような罪ある)状態は永きにわたり考え続けてはならない。(この道を)愛好するような人には(故実口伝といっても)秘密無用である。その器として適しているような(管絃の才能のある)人には(教え伝えることを)惜しんではならない。月の明るいような晩(など)、一晚中音楽を奏でて(過ごせ)ば、腹立たしいようなことをも忘れて、「極楽浄土の(すばらしい声で歌うという迦陵頻伽と呼ばれる)鳥の声も、風の音も、池の波(音)も、鳥のさえずりも、この(楽の音の)ようにすばらしいであろう。早く早く(往生して極楽に)参上してそれらを聞きたいものだ」と思うにちがいない。そのよう(に心掛ける)ならば、(音楽の道によって仏の)功德を受けることはあっても、(まさか決して)罪にはなるはずがない。また、(反対に)こ(の道)を強いて(他人から)隠して、他人には間違ったやり方で(演奏を)させて、(自分の)心の内では(その他人を)けなし(せせら)笑って、「自分だけが誰よりも勝れ(た楽人でい)よう。そして世間からはすばらしい名人よとはやされて、それによって儲けを得よう」(など)と思うならば、どうして罪もなからう(いや、そういう人は罪を犯していることになるはずだ)。だから、(この道に地獄はないといっても、従事する人の)心がけ次第に違いないと思うのである。

## 解答

(一) イ 決して、決して

ウ 音楽の才能のあるような人間には伝授を控えてはならない  
オ 他人には間違った演奏の仕方を見せて

(二) 音楽の道の目的は上達することで、利益を求めることではないので、罪を得ることはないということ。

(三) 利欲を思わず、ひたすら音楽を愛好し、往生を願うこと。

#### 解説

(一) イ 基本的な語法を問う問題。「あなかしこ」は、「あな＋形容詞(かしこし)の語幹」の形で、「ああ畏れ多い」の意味が原義である。しかし、この場合のように禁止表現と呼応すると(ここでは「べからず」。ほかに「な」や「そ」がある)、「決して～するな」という呼応(陳述)の副詞になる。それゆえ、ここでは「決して、決して」と訳す。なお、「あなかしこ」以外にも「かまへて・ゆめゆめ」に同様の用法がある。確認しておこう。

ウ まず、傍線部の構造を掴まえるところから始めよう。この傍線部がおおよそ「その器物」「かなひたらん人には」「惜しむべからず」に区切れることは大丈夫であろう。その上で考えたいのは、「その器物」がどこにかかるといえることである。具体的に言えば、「その器物」が「かなひたらん人には」なのか、「その器物」を「惜しむべからず」なのかという問題である。ここで注目したいのが、直前の「好まん人には隠すべからず」である。この文が傍線部と対をなしていることは、「～ん人には～べからず」という形から明らか。とすれば、傍線部も「その器物かなひたらん人」で一まとまりということになる。

では、この「その器物かなひたらん人」はどのような意味になるのか。すぐにその意味がわかった人は少ないと思うが、言葉に即して意味をとれば、「その器が条件にぴったり合っているような人」となる。このような「器」の用法は、現代語にもある。「総理大臣の器ではない」というような用法から推して、「才能・素質」の意だと考えたい。それが適っているというのだから、結局「その才能があるような人」というほどの意味になる。

右の点を押さえた上で傍線部を逐語訳すると、「その才能があるような人には惜しんではならない」となる。このような逐語訳をした上で次に考えたいのは、「その」という指示語の指示対象の明示と「何を」惜しんではならないのかという省略文節の補充である。

まず前者の指示語だが、これは「管絃」について書かれている箇所なので、「音楽」とすぐにわかるだろう。また後者の省略文節だが、直前の「好まん人には隠すべからず」も参考にすると、「自分の知っていることを伝えること」のような内容だとわかるだろう。一言で言えば、「伝授」ということになる。それゆえ、逐語訳にこの二点を加えて答案とする。

オ 傍線部の構造を掴むことは容易であろう。逐語訳は「他人にはよくないようにさせて」となる。むしろ、この問題のポイントが、「よくないようにさせて（＝わろうせさせて）」の内容をはっきりと訳出する点にある。傍線部の続きを読むと、傍線部のように他人にさせた結果、内心では「われひとりには人にすぐれん。さてよにいみじきものに言はれて、これをせうとくにせん」と思うのだという。つまり、「人にはわろうせさせて」と「われひとりには人にすぐれん」が対応しているのである。このことから、「よくないようにさせて（＝わろうせさせて）」とは、「自分だけが他人よりも勝れた楽人であるようにすること」すなわち「他人には間違った演奏の仕方をさせること」だとわかる。

(二) 傍線部にある「料物」は、直前の文の「価」とほぼ同じ意味で、「費用・代価」の意である。したがって、通常の語順に直して傍線部を訳すと「音楽の道にはその代価がないから地獄がない」となる。と、ここまでは難なく進んで来られただろう。しかし、この設問で要求されているのは「現代語訳」ではなく「内容説明」である。したがって、右のままではまだ答案と呼ぶわけにはいかない。右の訳を土台にして、その内容を考えるのがここでの作業課題なのである。

では、ここで考えるべきことは何か。それは「代価がない」と「地獄がない」ことの意味する内容を含めて、「両者がどういう論理で繋がるのか」という点であろう。傍線部では両者を直結させて「代価がない↓地獄がない」としているが、その間の論理を補うこと、すなわち現代文でよくやる「中間項の指摘」を行えばよいのである。それを次に考えていこう。

「代価がない」とは「利益・代償物を求めている」ということであるが、では何のために音楽をやるのか。それは、(三)とも関連するが、文章の後半（特に「また」前後の対比）に注目すると、「ただ音楽が好きだから・上達することが目的である」というようなことが見えてくるだろう。また、何故「利益を求めず上達のみを目的として音楽をすること」が「罪を得ない（＝地獄がない）」ことに繋がるのかと言えば、「執着がない」からである。これは本文にはっきりと書いてあるわけではないので、答案に盛り込まなくてもよからうが、東大古文ではしばしばこの「執着」に関する出題が見られる。それゆえ、東大受験生としては、一応押さえておきたい点ではある。

以上のことをまとめると、「代価がない⇨利益・代償物を求めない⇨上達を目的とする・音楽自体を楽しむ⇨執着することがない⇨罪を得ることがない⇨地獄がない」という論理である。この論理を説明してやれば、傍線部の説明になる。

(三) 基本的には「かやう」という指示語の内容を指摘するだけの問題である。落ち着いて処理していこう。

この「かやう」は「あなかしこ」から「と思ふべし」までを指している。長大な指示範囲なので簡単に内容を押さえておくと、①決して欲得を考えてはならない、②音楽を愛する人たちを大切にし純粋に音楽を愛すべき、③極楽浄土を思うべき、くらいにまとめられるだろう。解答欄が一行しかないのです、以上の点をなるべく過不足なくまとめいくことである。その際、「かやうならば、功德は得とも、罪にはなるべからず」という後続の内容にも目配りをして、ポイントを絞り込んでいこう。余分な内容を書いている余裕はない。いつも以上に、シャープな答案にしあげたい。